

INTERVIEW

全国大会を振り返って

指揮者 椎葉 恭介さん(42)

2年ぶりの全国大会出場はうれしく、誇りです。2-1のみんなや、指導してくれた皆さん、練習を手伝ってもらった消防団員に感謝しています。若い選手がたくさんいるので、4年後は全国大会で入賞してもらいたいです。

1番員 中釜 由晴さん(26)

初めてばかりで、戸惑いや緊張がありました。満足のいく結果ではありませんでしたが、各代表の操法を見て、自分たちに足りないものを感じられた有意義な大会でした。今後は全国との差を縮められるよう頑張ります。

2番員 瀬谷 憲功さん(30)

皆さんの応援もあり、精一杯競技できました。自分の力が出せず、思うような結果が出なかったことが悔しいです。大切な経験をこれからの消防団活動に生かします。足りない部分を直し、これからの大会に臨んでいきます。

3番員 中田 潔裕さん(27)

今までと違う雰囲気緊張しましたが「もうやるだけだ」と言い聞かせました。皆さんの指導や応援のおかげで頑張ることができました。「次は絶対」という気持ちが強いです。4年後、また皆さんを全国に連れて行けるように練習し直します。

4番員 椎葉 浩樹さん(27)

少ない人数で全国大会に行けたことを誇りに思っています。2月からずっとあきらめずに練習してきました。県代表として出場する全国大会の雰囲気はなんとも言えない大舞台でした。4年後のリベンジに向け、初心に戻り頑張ります。

補助員 椎葉 英志さん(36)

全国大会では、みんなが満足できるような結果が出せなかったのは残念でしたが、一つの目標に対して、本気でやることの大切さを学びました。本当に良い経験ができたと思います。また全国の舞台に立てるように努力したいです。

部員 沖松 泰豪さん(23)

補員として参加し、悔しい思いをしましたが、私も選手として全国大会に出たいと心から思いました。経験も技術も未熟ですが、今後力をつけて、必ず全国大会で良い結果を出したいです。



プレッシャーや地元からの期待。たくさんの思いを背負って挑んだ夢の舞台

たくさんの観客が見守る中、最後まで堂々と競技した選手たち



4必勝を願い、掲げられた応援旗5「熊本県代表」の名誉をたつた8人でつかみとつた6応援者たちが選手を激励。1列になり、ハイタッチを交わした



1最後まで大きな声で前向き、堂々と競技する選手たち
2スタンドには家族、住民などたくさんの応援団3会場には全国のポンプ車がずらり



消防団長 土屋 登志久さん (56=馬場)

頼もしい湯前のナンバーワン

各都道府県のトップが集まる大会です。ほんの少しのミスが大きく響きます。選手たちはとても悔しかったと思いますが、力いっぱいやってくれました。地元からもたくさん応援にきていただき、声援が選手の力になりました。第2分団第1部は有事のときにも頼もしく、湯前の消防団を引っ張る存在です。選手たちの熱心な姿勢が他の団員にも伝染してほしいです。

わかない。ホースの展長ミスなど、普段は絶対に起きないことが起きてしまった。あきらめず、最後まで全力を尽くしたが、結果は148点(第一:57.85秒、第二:62.86秒)で17位。優勝得点は183点。優勝を目指せる実力があつただけに、選手たちにとって悔しい結果だった。

濱砂部長は「上位入賞できなかったが、選手は仕事、家族との時間など多くのものを犠牲にして頑張ってくれた。誇りに思う。全国に連れて行ってくれたことに感謝したい」と選手をねぎらう。「全国に残した忘れものは必ず取りに行く」と話す選手たち。悔しさは収穫になった。4年後のリベンジに燃えている。

悔しさ残る17位。4年後、もっと強くなる 忘れ物は、必ず取りに行くー

10月19日、富山県富山市広域消防防災センター。選手は消防甲子園の舞台に立った。大会は消防庁と日本消防協会が主催。昭和43年以降、2年ごとに開催し、26回目。47都道府県の代表48隊(ポンプ車の部23隊、小型ポンプの部25隊)が出場した。

会場には巨大スクリーンが設けられ、特設スタジアムは1万人以上の応援者でうめつくされた。午前9時、音楽隊の演奏に合わせて入場行進。第2分団第1部はブラカードを持つ椎葉英志さん(36)下染田)を先頭に堂々と入場した。開会式後、地元から駆け付けた町、消防関係者や家族、住民らが激励。選手たちは一人一人とハイタッチを交わし、道具の最終確認やウオーミングアップをして出番に備えた。

責任や期待。選手のプレッシャーは計り知れない。福井県代表の競技が終わり、17番目。出番がやってきた。全国の選手を襲い続けていた魔物が第2分団第1部を襲う。指揮者の「集まれ」の声がかかるも、選手の足が集合線にそる